

おおひらひがしししょうがっこう  
大平東小学校



あんししょうしぶんしゅう

# 暗唱詩文集

何度も音読したり暗唱したりすることで豊かな「ことば」を育みます。

名前

名前

すべて合格した人には賞状を授与します。

- |   |                  |                          |   |                   |                          |
|---|------------------|--------------------------|---|-------------------|--------------------------|
| ⑧ | 論語<br>ろんご        | <input type="checkbox"/> | ⑬ | 黄金虫<br>こがねむし      | <input type="checkbox"/> |
| ⑦ | 方丈記<br>ほうじょうき    | <input type="checkbox"/> | ⑭ | 山のあなた<br>やま       | <input type="checkbox"/> |
| ⑥ | 春暁<br>しゅんぎやう     | <input type="checkbox"/> | ⑮ | 小景異情<br>しょうけいいじょう | <input type="checkbox"/> |
| ⑤ | 平家物語<br>へいけものがたり | <input type="checkbox"/> | ⑯ | おくの細道<br>おくのほそみち  | <input type="checkbox"/> |
| ④ | 枕草子<br>まくらのそうし   | <input type="checkbox"/> | ⑩ | 徒然草<br>つれづれぐさ     | <input type="checkbox"/> |
| ③ | 春の七草<br>はるななくさ   | <input type="checkbox"/> | ⑪ | 偶成<br>ぐうせい        | <input type="checkbox"/> |
| ② | 月の異名<br>つきいみょう   | <input type="checkbox"/> | ⑫ | 初恋<br>はつこい        | <input type="checkbox"/> |
| ① | 十二支<br>じゅうにし     | <input type="checkbox"/> | ⑨ | 竹取物語<br>たけとりものがたり | <input type="checkbox"/> |

順番じゅんばんに関係かんけいなく、気きに入った詩文しぶんから音読おんどくしたり  
暗唱あんしょうしたりしましょう。  
スラスラと暗唱あんしょうできたら合格ごうかくです。

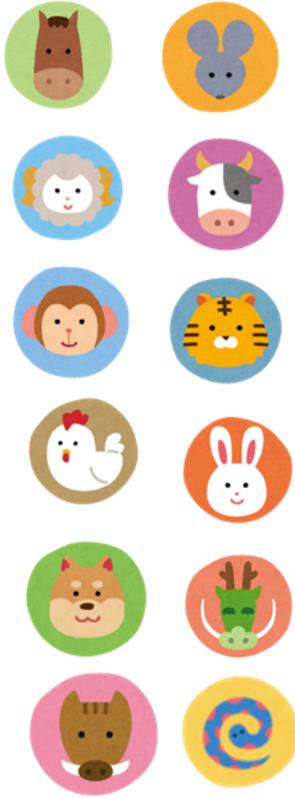
① 基礎

十二支

十二支 じゅうにし

子 ね  
丑 うし  
寅 とら  
卯 う  
辰 たつ  
巳 み

午 うま  
未 ひつじ  
申 さる  
酉 とり  
戌 いぬ  
亥 い



合格印

子 (ネ) || 鼠 (ねずみ)  
丑 (ウシ) || 牛 (うし)  
寅 (トラ) || 虎 (とら)  
卯 (ウ) || 兔 (うさぎ)  
辰 (タツ) || 竜 (たつ)  
巳 (ミ) || 蛇 (へび)  
午 (ウマ) || 馬 (うま)  
未 (ヒツジ) || 羊 (ひつじ)  
申 (サル) || 猿 (さる)  
酉 (トリ) || 鶏 (とり)  
戌 (イヌ) || 犬 (いぬ)  
亥 (イ) || 猪 (いのしし)

② 基礎 月の異名

月の異名  
つき いみよう

睦月  
むつき

如月  
きさらぎ

弥生  
やよい

卯月  
うづき

皐月  
さつき

水無月  
みなづき

文月  
ふみづき

葉月  
はづき

長月  
ながつき

神無月  
かんなづき

霜月  
しもつき

師走  
しわす

月の異名・・・昔の月の言い方

睦月・・・一月

如月・・・二月

弥生・・・三月

卯月・・・四月

皐月・・・五月

水無月・・・六月

文月・・・七月

葉月・・・八月

長月・・・九月

神無月・・・十月

霜月・・・十一月

師走・・・十二月

合格印

Blank box for the合格印 (Passing Seal).

③ 基礎 春の七草

はる ななくさ

春の七草

せり なずな

ごぎょう はこべら ほとけのざ

すずな すずしろ

これぞ七草 ななくさ



七草がゆ



せり



なずな



ごぎょう  
(ハハコグサ)



はこべら  
(ハコベ)



ほとけのざ



すずな  
(カブ)



すずしろ  
(ダイコン)

合格印

春の七草とは、春の早いころに見られる七種類の植物のこと。  
 一月七日には、これら七種類の植物をおかゆに入れた「七草がゆ」を食(た)べて、一年間の健康(けんこう)を祈(いの)ります。

④ 古文 枕草子 清少納言

まくらのそうし

せいしょうなごん

枕草子

清少納言

はる

よ よ しろ

やま わ

春は、あけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、

すこしあかりて、紫だちたる雲の、細くたなびきたる。

むらさき

くも

ほそ

なつ よる つき

夏は夜。月のころはさらなり、闇もなほ、

やみ

お

ほたる

おお

と

い

ひと

ふた

螢の多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、

ほのかにうちひかりて行くもをかし。

ゆ

お

あめ

ふ

お

雨など降るもをかし。

合格印

春は夜明けが良い。だんだん白んでゆく山際が、少し明るくなつて、紫がかつた雲が細くなびいているのが良い。夏は夜が良い。月のあるころは言うまでもない。闇もやはり螢がたくさん飛び交っているのが良い。また、ただ、一つ二つなど、かすかに光って飛んでいくのも面白い。雨などが降るのも面白い。

⑤ 古文 平家物語

へいけものがたり

平家物語

作者不詳 (だれが書いたか分からない)

ぎおんしょうじゃ かね こえ しよぎようむじよう ひび

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり。

しやらそうじゆ はな いろ じゃうしゃひっすい ことわり

娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。

ひと ひさ ただはる よ ゆめ

おごれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。

もの つい ひとえ かぜ まえ ちり おな

たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ。

合格印

祇園精舎の鐘の音には、諸行無常すなわちこの世のすべてのことは絶えず変化していくものだという響きがある。

娑羅双樹の花の色は、どんなに勢いが盛んな者も必ず衰えるものであるという道理をあらわしている。

世に栄え得意になつていても、その栄えはずつとは続かず、春の夜の夢のようにはかないものである。

勢い盛んではげしい者も、結局は滅び去り、まるで風に吹き飛ばされる塵と同じようである。

⑥ 漢文 春曉 孟浩然

しゅんぎよう

春曉

もうこうねん

孟浩然

しゅんみん

春眠

あかつき

曉

おぼ

を覚えず

しよしよ

処処に啼鳥を聞く

ていちよう

き

やらい

夜来

ふうう

風雨の声

こえ

はなお

花落つること知んぬ多少ぞ

し

たしよう

合格印

春の眠りは朝が来たことに気付かないほど心地よく、寝過ごしてしまふ。

春、あたたかな蒲団の中でふと目を覚ました。

もう部屋の中は、明るい日差しでいっぱいだ。

「ああ、気持ちいい。もう少しこのまま、こうして横になっていたいなあ・・・」

耳には、鳥のさえずる声が近く、遠く響いてくる。

きつと外は、緑に満ちあふれている。

「そう言えば昨日の夜は、ものすごい雨と風だったっけ・・・。通り過ぎてしまえば、まるでうそみたいだけだ」

うとうとしながら考えているうちに、ふとはっとした。

「そう言えば、嵐で、あんなに咲いていた花も散ってしまったのかな。どれくらいちったのかな」

そう思いながら、また眠りに引き込まれていく。

季節はいつしか、春の終わり。そして、こんなに気持ちいい眠り、他にない。

⑦ 古文 方丈記 鴨長明

ほうじょうぎ

かももちょうめい

方丈記

鴨長明

ゆく河かわの流れは絶たえずして、

しかも、もとの水みづにあらず。

淀よどみに浮うかぶうたかたは、

かつ消きえかつ結むすびて、

久ひさしくとゞまりたる例ためしなし。

世よのなか中にある人ひとと栖すみかと、またかくのごとし。

合格印

川の水は絶たえることなく流ながれて  
元もとの水のままではない、淀よどみに浮うか  
ぶ水あわの泡きも消むすえたり結むすんだりで、同  
じ状態じょうたいにはない。世よの人ひとと住すまい  
もこのようなものだ。

⑧

漢文

論語

孔子

ろんご

論語

こうし

孔子

しい  
子曰わく、

まな とき こ なら  
学びて時に之れを習う、  
また よろこ  
亦た説ばしからず乎。

ともあ えんぼう き  
朋有り遠方より来たる、  
また たの  
亦た樂しからず乎。

ひとし  
人知らずして慍らず、  
また くんし  
亦た君子ならず乎。

中国では「子」は先生という意味  
なので、孔子は孔先生ということ。

孔先生は言う。

繰り返して学び、

友達と学問について話し、

人から評価されずとも怒らないの

が学ぶ者の姿だ。

合格印

⑨ 竹取物語

たけとりものがたり

竹取物語

作者不詳 (だれが書いたか分からない)

いま おかし たけとり おきな うもの のやま たけ と

今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつ

つ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきの造となむいひける。

その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。怪しがりて、寄りて見

るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつ

くしうてみたり。

今はもう昔のことになるが、竹取の翁と言う者がいた。野や山に分け入って竹を取り竹を取りしては、いろいろな物を作るのに使っていた。名をさぬきの造といった。(いつも取る)竹の中に、根元が光る竹が一本あった。不思議に思っ近寄ってみると、筒の中が光っている。それを見ると、三寸ばかりの人が、とてもかわいらしい姿で座っている。  
寸・・・約3.03センチメートル

合格印

⑩ 徒然草

つれづれぐさ

徒然草

よしだけんこう

吉田兼好

つれづれなるまゝに、日暮らし、硯におかひて、心にうつりゆくよしな  
し事を、そこはかどなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

これは、暇にまかせて一日中机の前にいるときに心に浮かんだことを適当に書きとめておいたものである。したがって、実にくだらない馬鹿馬鹿しいものである。

合格印

⑪ 漢文

偶成

朱熹

ぐうせい

しゆき

偶成

朱熹

しょうねんお

やす

がくな

がた

少年老い易く学成り難し

いっすん

こういんかろ

一寸の光陰軽んずべからず

いま

さ

ちとうしゆんそつ

ゆめ

未だ覚めず池塘春草の夢

かいぜん

ごよう

しゆうせい

階前の梧葉すでに秋声

年はすぐにとつてしまつても

のだが、学問はなかなか成しと

げることができない。だから、

わずかな時間でもむだにして

はならない。池のそばに芽を出

した春の草が夢を見ているう

ちに、いつのまにか庭先の

青桐の葉には、秋風がしのびよ

つている。そのように、月日は

あつというまに過ぎ去つてし

まうものである。

合格印

⑫ 現代文 初恋 島崎藤村

はまだあげ初めし前髪まへがみの

林檎りんごのもとに見えしとき

前にさしたる花櫛はなぐしの

花ある君と思ひけり

やさしく白き手をのべて

林檎りんごをわれにあたへしは

薄紅うすくれないの秋あきの実に

人ひとこひ初めしはじめなり

合格印

少女きよとの清うららかなで初はつ々たいしい初恋はつこいを七五調しちごてうのリズムでうたったもの。  
少女との出会い、恋めの芽ば生え、恋の成就じゆうじゆ、回想かいそうの四部構成しぶこうせいになっている。  
まだあげ初めし前髪まへがみの・・・お下げ髪を日本髪にっぽんがみに結ゆいまじめた、その髪が。  
林檎のもと・・・林檎の木の下に。  
花櫛はなぐし・・・造花ぞうかでかざった櫛くし。  
花ある君・・・花のように美しい君。  
あたえしは・・・与えたことは。  
人こひ初めし・・・人をはじめて恋しく思おもった。

わがこころなきためいきの

かみ け

その髪の毛にかかるとき

こい さかずき

たのしき恋の盃を

きみ なさけ く

君が情に酌みしかな

りんごばたけ こ した

林檎島の樹の下に

ず ほそみち

おのづからなる細道は

た ふ

誰が踏みそめしかたみぞと

と い

問ひたまふこそこひしけれ

合格印

こころなきためいきの・・・思い余

つてもらす恋のためいき

おのづからなる・・・自然にできた。

かたみ・・・記念

問ひたまふ・・・お聞きになる。

⑬

現代文

黄金虫

野口雨情

黄金虫

こがねむし

野口雨情

のぐちうじょう

黄金虫は、

こがねむし

金持ちだ。

かねも

金蔵建てた、

かねぐらた

蔵建てた。

くらた

飴屋で水飴、

あめや みずあめ

買って来た。

か き

黄金虫は、

こがねむし

金持ちだ。

かねも

金蔵建てた、

かねぐらた

蔵建てた。

くらた

子供に水飴、

こども みずあめ

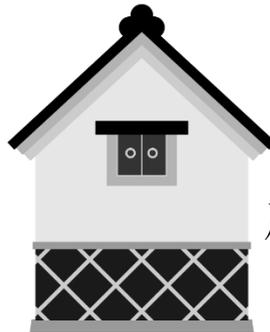
なめさせた。



水あめ



コガネムシ



蔵

合格印

Blank box for a stamp or mark.

⑭

現代文

山のあなた

カールリーブツセ

山のあなた

カールリーブツセ

上田 敏 訳

山のあなたの空遠く

「幸」住むと人のいふ。

噫、われひとと尋めゆきて、

涙さしぐみかへりきぬ。

山のあなたになほ遠く

「幸」住むと人のいふ。

山のかなたの果てしない遠くに、  
幸せがあると人が言う。

私もみんなと一緒に  
行つて、その幸せをさがし  
求め続けてきた。でも、幸  
せは見つからなかった。そ  
して、涙のあふれた目のま  
ま帰ってきた。

それはとても悲しいことだ  
ったけれど、でも幸せがな  
いというわけではない。山  
のあなた遠く遠く向こうに  
幸せがあると人が言う。

どこかにー、どこかに、き  
つとあるんだよ。

合格印

⑮ 現代文 小景異情 室生犀星

しょうけいいじょう

小景異情

むろうさいせい

室生犀星

とお

ふるさとは遠き<sup>とお</sup>にありて思ふもの

おも

かな

そして悲しくうたふもの

う

よしや

いど

かたい

うらぶれて異土の乞食<sup>いど</sup>となるとても

かえ

帰るところにあるまじや

ふるさと

故郷とは、遠くにいて思い出すものである。

そして悲しくうたうものである。

たとえ、

落ちぶれて、故郷<sup>ふるさと</sup>ではない土地<sup>とち</sup>で乞食<sup>こじき</sup>にな

ったとしても、

(決して) 帰るところではないだろう。

一人で都の夕暮<sup>ゆぐ</sup>れに、故郷を思い出しなが

ら涙<sup>なみだ</sup>ぐむ。

そんな気持ちで、

遠い都に帰ろう。

遠い都に帰ろう。

合格印

ひとり都みやこのゆふぐれうに

ふるさとおもひいなみだ涙ぐむ

そのころもて

遠とおきみやこにかへえらばや

遠とおきみやこにかへえらばや

合格印

①6

古文

おくの細道

松尾芭蕉

おくの細道

ほそみち

松尾芭蕉

まつおばしやう

つきひ

はくたい

かかく

ゆき

うとし

またたびびとなり

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。

ふね

うえ

しょうがい

舟の上に生涯をうかべ、

うま

くち

え

お

う

もの

馬の口とらへて老いをむかふる物は、

ひびたび

たび

すみか

日々旅にして、旅を栖とす。

こじん

おお

たび

し

古人も多く旅に死せるあり。

月日というものは、永遠えいえんに旅を続ける

たびびと

旅人たびびとのようなものであり、来ては去り、

去きつては来る年もまた同じように旅人

である。船頭せんじゆうとして船の上に生涯しょうがいをう

かべ、馬子まごとして馬のくつわを引いて老

いを迎むかえる者は、毎日旅をして旅をすみ

かとしてむかいるようなものである。昔の人

のなかには、旅の途中とちゆうで命を落とす人が

多くいる。

合格印

あんししょうしぶんしゆう  
「暗唱詩文集2」の目次  
もくじ

①⑦ 雪 ゆき □

①⑧ 古今和歌集より こきんわかしゆう □

①⑨ 春望 しゅんぼう □

②⑩ 弁天娘女男白波 べんてんむすめおのしらなみ □

②① 曾根崎心中 そねざきしんじゆう □

②② 松尾芭蕉の俳句 まつおばしょう はいく □

②③ 寿限無 じゅげむ □

②④ 石川啄木「一握の砂」 いしかわたくぼく いちあく すな □

②⑤ 学問のすゝめ がくもん す □

②⑥ 吾輩は猫である わがはい ねこ □

②⑦ 坊ちゃん・草枕 ぼっ くさまくら □

②⑧ 蜘蛛の糸・鼻・羅生門 くも いと はな らしやうもん □

②⑨ 走れメロス はし □

③⑩ 静夜思 せいやし □